

2024年3月 24 日 久宝教会 棕梠の主日(受難節第 6 主日)礼拝メッセージ

「真実とは何か」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 18章 28-38 節

2 月の半ばから始まっていた 7 週間にわたるレント(受難週)も、いよいよ最後の一週間となりました。この週は、イエス様が十字架に架けられる受難へと向かう一週間として、特別に「受難週」と呼ばれています。教会暦では今日はイエス様一行が群衆に歓迎されてエルサレムに入城した日であり、その際に人々が(以前は「棕梠の葉」と訳されていましたが)「なつめやしの葉」を手に持って歓迎したということから、今日は「棕梠の主日」と呼ばれています。この後、木曜日には「最後の晚餐」があり、その際にイエス様が弟子たちの足を洗ったということから「洗足木曜日」と呼ばれる日があり、いよいよ十字架に架けられる受難日の金曜日は、英語では「Good Friday」と呼ばれています。そして次の日曜日は十字架での死から 3 日目の朝にイエス様が引き起こされたことを記念してお祝いするイースター(復活祭)となるわけです。

さて、そのような教会暦に基づくと、今日は「ヨハネによる福音書」12 章にあるエルサレム入城のお話を読むべきですが、来週がイースターとなると、一気に 20 章まで飛んでしまいますので、今日は「最後の晚餐」を終え、弟子から裏切られ、大祭司の手下たちによって逮捕され、尋問を受けた後、ローマ帝国の総督であったピラトから再度の尋問を受けた場面を読みました。ローマ帝国は、その支配する植民地の国々に対して、納税などの義務を果たせば一定の自治を認めていました。それは植民地の民の不満を募らせないためでもあり、また面倒なことや細かいことには関わりたくないということでもありました。さらには、仮に支配者に対する民衆たちの反感が高まった場合にも、その怒りの矛先が、直接ローマ帝国の支配者に向かうよりも、まずローマ帝国の手先となって自分たちを管理しているユダヤ人指導者たちに向かうようにしていたという実利的な効果もあったようです。

ユダヤ教の指導者たちが教えていることとは異なる教えを、イエス様が民衆に広めていることを、煙たく思っていたユダヤ教指導者や権力者たちは、イエス様を殺そうと思いましたが、31 節にあるように植民地の民には「人を死刑にする権限」が認められていませんでした。そのために彼らはイエス様を、総督ピラトの官邸に

まで引っ張って来ました。とはいえ、ユダヤ教の指導者である彼らは、異教徒であるローマ人の家に足を踏み入れたら、自分たちは宗教的に汚れしまうということに忌み嫌い、「汚れないで過越の食事をするため」(28)に、官邸の中には入ることはありませんでした。このことから、地上の権力としてはローマ帝国におもねっていたとしても、内心は「自分たち古代イスラエルの民こそが神に選ばれた聖なる民族であり、汚れている異教徒とは交わらないようにしていた。いずれ敵国であるローマ帝国の支配からも解放され、ついにはやっつけてやる」というような相手を見下した選民思想があったということが読み取れます。

ピラトはイエス様を連れて来た大祭司たちに「この男に対して、どんな訴えを起こすのか」、つまり「どんな悪事を働いたというのか」と問いましたが(29)、人々は「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言って、明言を避けています(30)。これも互いに責任逃れをしようとしているからでしょう。仕方なく、ピラトはイエス様との直接交渉に出ます。33節です「お前はユダヤ人の王なのか」。つまり、宗教指導者たちにしてみると、異教徒・異邦人であるローマ帝国の皇帝のことを王とは言わないけれども、「このイエスという男が『自分が王である』と言って、群衆をたぶらかして扇動した」と言えば、ローマ帝国支配に対する反抗行為となるので、ローマによって処刑してもらえる、という目論見だったのだらうと思われまます。ですからピラトもそのように聞いていたのでしょう。

しかし、そんなピラトに対して、イエス様は「あなたは自分の考えで、そう言うのか。それとも、ほかの者が私について、あなたにそう言ったのか」(34)と問い返されました。その後も両者の噛み合わない問答が続き、最終的には37節でピラトが「それでは、(お前は)やはり王なのか」と言い、それに対してイエス様が「私が王だとは、あなたが言っていることだ」と答えられました。このイエス様の答えを「はい、その通り。私が王です」と翻訳している聖書(口語訳、新改訳)もありますが、ギリシャ語の原文では聖書協会共同訳の通り、「はい、そうです」ではなく、「私が王だとは、あなたが言っていることだ」となっています。もしも本当にそうであるならば「はい、そうです」と言えば簡潔明瞭なのに、何故わざわざそのような回りくどい言い方をしているかという、それは明らかに「そうではない」からです。イエス様してみると「あなた(ピラト)が私のことを何と言おうと、人々が私のことを何と言おうと、

そんなことは関係がない。重要なことではない」ということだったのでしょう。そもそも 36 節では「私の国は、この世のものではない」と言っていました。ピラトには全く理解されていませんでした。

そしてイエス様は「私は、真理について証しをするために生まれ、そのために世に来た」(37)と言い直されました。それを聞いたピラトは何を思ったのでしょうか。目の前に連れて来られた薄汚い一人のユダヤ人。縛られており、逃げ出すことも出来ず、話す以外は何も出来ない、仲間からも見捨てられた無力なたった一人の男。その男が証しする真理など一体何の役に立つというのか。ピラトは言いました「(お前が言う) 真理とは何か」……。ピラトが問うたように、イエス様がその生涯をかけて、その身をもって証した「真理」「真実」とは一体何だったのでしょうか。一つ前の「ヨハネによる福音書」17 章を見ると、「最後の晚餐」の後、弟子たちへの遺言のような説教が続き、その後にイエス様による弟子たちのことをお祈りしている長いお祈りが記されています。そのお祈りの中に、「私が世から出た者でないように、彼ら(弟子たち)も世から出た者ではありません。真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの言葉は真理です」(16-17 節)とあります。つまり、ピラトに対して「私はこの世に属していない」と言ったのと同じことがここでも述べられていました。そして、その意味する所は「この世の価値基準で生きている人は、この世界に所属しているが、神の価値基準、真理・真実の価値基準に従って生きる人は、神の国に所属している」ということなのだと思います。イエス・キリストがその身をもって示した「真実」「神の国の価値基準」「神の選びの基準」とは、小さい人を大切にすること。世の中でつま弾きにされ、低みに立たされ、弱く小さくされている人たちこそを優先するということでした。そして「私を愛して下さったあなたの愛が彼らの内にあり、私も彼らの内にいるように」(17:26)、また「あなたが私の内におられ、私があるあなたの内にいるように、全ての人を一つにして下さい」(17:21)と言われているように、全ての人、全ての命が、命の源である神とつながって生かされているということ、イエス・キリストがいつでもどこでも共にいてくださるということに信頼して歩むということなのだと思います。

この後、ピラトは「私はこの男に罪を見出せない」(19:6)と言いつつも、厄介ごとが起こると面倒だということで、ユダヤ人たちに言われるがままにイエス様を十

十字架刑に処することを決定していきます。「マタイによる福音書」には「ピラトは手の付けようがなく、かえって騒動になりそうなを見て、水を取り、群衆の前で手を洗って言った。『この人の血について、私には責任がない。お前たちの問題だ』」(27:24)と書かれていますが、要するにイエスと呼ばれる一人のユダヤ人の処刑は、彼にとっては無責任に判断しても何も差支えのないような取り留めのないこと、造作のないことであり、ピラトはそのような自身の価値基準に則って、「この男は十字架につけてもよい」「この男の命には生かしておく価値がない」と判断したというわけです。

翻ってみると、私たちも日々の生活の中で、右を選ぶか左を選ぶか、判断を求められることが多々あります。小さいことではどちらを選んでも、あまり結果が変わらないこともありますし、時には二者択一の大きな選択が迫られることもあるかと思えます。先日は高校入試の季節でしたが、受験生当人たちにとっては、それぞれ「人生の一大事」だったのではないかと想像します。とは言え、右に行くのがよいのか、左に行くのがよいのか、それぞれの先には何が待ち受けているのかは、誰にも分かりません。先の分からないことを心配して、思い悩んでいても、気を病むだけですから、分からないことは分からないままに、神の国の価値基準、イエス・キリストの価値基準がどこにあるかを考えて、その時自分が正しいと思える所、真実があると感じる方を選ぶということしかないのだろうと思えます。それぞれ「右に行きなさい」「左に行きなさい」というような天からの声が「お告げ」のように聞こえて来ることはありませんが、どちらを選んだにせよ、神様が「私はいつでもあなたと共にいる」と言って下さっていることには変わりはありません。それぞれがイエス・キリストがその身をもって私たちに示し続けて下さっている「真実」なのだと思えます。ですから、私たちはその「真実」に信頼して、安心の内にここからの一歩を踏み出して行きます。